

日本型システムと電子のコミュニケーション

— 学生の心を開く一つの試み —

栗原宏文

も く じ

はじめに

- 1 授業用電子会議室の開設
 - 2 愛媛の学生はほとんど死んでいるように見える
 - 3 愛大生への指摘への第一段階の反応
 - 3.1 表面的反論
 - 3.2 指摘者への反発
 - 3.3 日本社会への責任転嫁論
 - 3.4 教育システムへの批判
 - 3.5 衝撃を受けて
 - 3.6 消極的受容と諦め
 - 3.7 積極的受容と内省
 - 3.8 指摘から何を学ぶか
 - 4 デイバート
 - 5 愛大生への指摘への第二段階の反応
 - 6 オフラインミーティング
 - 7 アンケート
- ま と め
- 謝 辞

は じ め に

法学系と経済・経営系を中核として、1996年4月に発足した愛媛大学法文

学部総合政策学科では、3、4回生向け専門教育科目に「組織コミュニケーション論」という2単位の選択必修科目が予定されていました。そしてそれは、1996年度に入学した学生が3回生になる1998年度から開講され、その授業は筆者が担当することになっていました。それまで主として情報管理論（といっても具体的な内容は「情報技術とコミュニケーション」と「電子ネットワーク社会論」）を担当していた筆者は、この「組織コミュニケーション論」を担当するに当たり、そのシラバスを検討するために、「組織」と「コミュニケーション」をキーワードとする各種の教科書、参考書を調べたが、残念ながら、学生が興味を示しそうな内容のものを見つけることができなかった。

そこで筆者は、「集団とコミュニケーション」や「日本人の社会行動」と「電子的コミュニケーション」や「電子ネットワーク」を融合して次のようなシラバスを準備しました。

1998年度前期「組織コミュニケーション論」シラバス

- 第1回 オリエンテーション：組織コミュニケーション論とは
- 第2回 集団とコミュニケーション
- 第3回 組織理論とコミュニケーション
- 第4回 日本人の社会行動
- 第5回 組織コミュニケーションの実態その1
- 第6回 組織コミュニケーションの実態その2
- 第7回 オフィスにおけるコミュニケーション その1
- 第8回 オフィスにおけるコミュニケーション その2
- 第9回 欧米での電子ネットワーク組織の実態
- 第10回 電子ネットワーク社会・組織の問題点と展望
- 第11回 社会・組織の心理的側面その1
- 第12回 社会・組織の心理的側面その2
- 第13回 予備
- 第14回 予備
- 第15回 テスト

一方、総合政策学科は情報教育の一貫として1996年秋頃から学科用に電子掲示板（いわゆるBBS（Bulletin Board System）のことで、以後、学科BBSと略称することもある）を導入し、希望する1回生には、それを自由に使わせていた。その年度に入学した学生が丁度3回生になる1998年度に「組織コミュニケーション論」を開講することになっていた。そこで、筆者は「組織コミュニケーション論」の授業とこの電子掲示板をリンクさせることを思いついた。具体的には、授業に関する質疑応答はこの電子掲示板内に設けられた「組織コミュ」授業用電子会議室でなされること、宿題やそれに答えるのもしかりです。更に、成績評価の方針として、レポートやテストの他に、授業に関する感想や質問などを電子会議室で積極的に発言したら学習参画として評価することにした。

初回の授業の時、そのような話をしたら、学生の方ではとまどいが少なくないようでした。まず、電子掲示板というものが何のことか全く知らない学生も少なくなかったし、それを使ったことのある学生は少数で、それを日頃使いこなしている学生は更に少ない数でした。そもそも、1996年度に学科に斡旋されてノートパソコンを買ったものの、それを充分使いこなすにまで至らず、宝の持ち腐れ状態になっている学生がかなりいた。私の話を聞いて、パソコンを使うのが面倒くさいので、履修するのを諦めた学生も少なくなかったようです。一方、「今までの講義のなかでコンピューターを使う授業はいくつかとりましたが、今回の「組織コミュニケーション論」のようにフルに活用するのは初めての体験なので、正直戸惑っています。（中略）ここしばらくBBSはあまり使っていなかったので、この機会にその他の会議室も少しのぞいてみようと思います。」のように、この機会に電子掲示板を使えるようになりたいという学生を含めて、実際に履修を決意したのは150名くらいでした。

1 授業用電子会議室の開設

「組織コミュニケーション論」授業用電子会議室（以後、会議室と略称する）

の開設は直ぐに出来たが、そこへ学生達を参加させるのが一苦勞でした。そもそも、自分のパソコンが壊れてしまったのでとか、他学からの3年次編入生なのでパソコンを持っていないので、という学生には学科の実験室のパソコンを使うように指示しました。電子掲示板とは何か、という学生には、知っている学生にデモをして貰うように指示しました。電子掲示板はどうすれば使えるのか、という学生には、電子掲示板への登録申し込み書を学科に提出することを指示しました。学科に提出しても、実際に登録されるには1、2週間程度はかかりました。そして、一応、電子掲示板を使える(前から使っていた、あるいは、新たに使えるようになった)学生には、会議室への登録を希望する電子メールを筆者宛に送るように指示しました。電子メールによる登録希望を受け取った筆者は、その学生を会議室に登録しました。会議室への登録とは、登録された学生がBBSにログインすると、会議室のアイコン(学科が導入したBBS SoftwareはFirst Class Visual Communication Systemという、GUI(Graphic User Interface)を備えた、ものでした)がパソコン画面に表示されるようにするということと、この会議室で発言したり、書き込みを読んだりできる権限を与えることです。登録が終わると、学生にはこのことを返信メールで知らせました。この手続きにとまどった学生は少なくなく、大半の学生が会議室へ登録されるまでには、授業開始以来一月以上かかりました。

会議室で学生に始めにお願いしたことは、まず「皆さん 自己紹介をお願いします。特に所属ゼミを教えてください。その他、サークル、出身地、趣味とかなんでも結構です。」ということでした。約35名が応じました。(他の人は多分まだ電子掲示板を使えない状態だったのでしょう。)
「出身地は地元、愛媛県伊予郡松前町という人口3万人程度の漁師町です。小・中学校は松前町内で通い、高校から松山市の松山南高校に通いはじめました。普段は原付で通学しているのですが、雨の日など電車で来るときは、およそ1時間かかるので大変です。趣味は人間 watching です。」と言った調子です。

次に、授業の内容についての感想が、一週間に80通くらい、寄せられます。「組織というものは、若年層から存在しているようにわたしは思います。私た

ちが高校生の頃、特に女子生徒の間では「グループ」と呼ばれる組織がありました。グループ外の人とはプライベートではほとんど関わらず、教室移動も、お弁当なものにもかもいっしょでした。修学旅行などで部屋決めをする際に、人数の関係で、一人だけ違うグループの人たちと同じ部屋に回されたりすると、泣き出してしまう人もいたくらいです。また、グループどうしでの対立に加えて、グループ内でも仲間外れ等の問題がよく起こったりしました。ここは内部が安定しているときは、確かに「心地よい」場所になり得ますが、ひとたび自分がターゲットになると、非常に針のむしろのような場所になるのです。このような「グループ」は一つの組織であるとおもいます。他者を排除することで優越を保ち続ける組織です。そしてそれは子供だけでなく、大人の中にも多々あるように思えます……。」と言った調子です。

しばらくして、「現在の学科 BBS におけるコミュニケーションをどう考えるか、について 200 字以上述べて下さい。(BBS にまだ参加できてない人もいたので) この宿題は必須ではありませんが、やれば学習参画として評価します。」という第 1 回目の宿題を出しました。代表的な応答は「今までの学生生活を振り返ってみると、他の人に自分と相手との会話や意見交換が知られてしまうなんてことはありませんでした。だから、学科 BBS でのコミュニケーションにもまだ抵抗があります。そう思う反面、いろんな人の考えを知ったり、自分の意見をいろんな人に知ってもらい、意見してもらうことへの興味もまたあるのです。ワンクッションおいてお互いの意見を交換する。BBS はシャイな日本人には打って付けの方法なのではないでしょうか。もっとたくさん、BBS を利用する授業があれば、より多くの生徒が BBS を利用し始めると思います。そうして、コミュニケーションの輪を広げていくことができれば生徒たちにおける BBS の価値がもっと重要なものになっていくのではと思います。」のように、この授業での新しい試みへの期待が感じられるものでした。こうした宿題には、毎回 120 名くらいからの回答がありました。

2 愛媛の学生はほとんど死んでいるように見える

丁度、その頃です。新聞にある書評が載っていました。読んでみますと、「愛媛の学生はほとんど死んでいるように見える」という文言が出ていました。3年前に松山に赴任して来たばかりの私は大変興味をそそられ、早速、その本を買って一読し、学生の意見を聞きたいので、会議室で「愛媛の学生はほとんど死んでいるように見える」と題して次のように紹介しました。

「日本型システムの終焉 上田紀行 法蔵館 1998」という本があります。上田紀行氏は1993年4月から1996年3月まで愛大の教養部で文化人類学を教えておられました。読売新聞の(養老孟司による)書評によりますと、「著者からすれば、愛媛の学生はほとんど死んでいるように見えるらしい」とあります。

ヘッディングの中には次のようなものもあります。

洗脳教育からの脱出

自分の意見のない学生たち

文句を言わない風土

・・・氏の愛媛攻撃

馬の耳に念仏

意欲をそぐ大学

「サティアン」のような教育

皆さんに一読を勧めます。私の講義の参考文献に追加したいと思います。皆さんがこの本から、色々なことを感じて、その感想をこの会議室に入れることを期待します。」

でも、直には反応はありませんでした。そこで、更に、以下のように第2回目の宿題を出しました。

「以下の中から一つ選んで、感想を200字以上述べて下さい。

1 上田紀行 「日本型システムの終焉」の中に次のような記述があります。

・ぼくがこの大学に来て驚いたのは、自分の意見をまったくもっていない

学生の多さだった。pp.148

・愛媛の教育の目的が、過労死も厭わず、何の疑問も感ぜず、権威に服従する兵隊アリを育てようとしていることがよく分かった。pp.178

2 最近の学科 BBS の一般会議室での出来事について

設問を二つの中から選択できるようにしたのは、学生に特定の本を買わせるようなことは避けたかったのと、丁度、学科 BBS の中で、ある種の事件が発生していて、学生にそうしたことから学んで欲しいと思ったからでした。宿題ということもあって、130名くらいから応答が寄せられましたが、蓋を開けて見ますと、2つの設問の内、圧倒的多数が設問1を選んでいました。それほど、上の記述は挑発的だったのかも知れません。

3 愛大生への指摘への第一段階の反応

宿題2における上田氏の記述への学生からの感想は数週間に渡って会議室に書き込まれました。上田氏の記述は二つありますが、その始めの方の「ぼくがこの大学に来て驚いたのは、自分の意見をまったくもっていない学生の多さだった」という記述に寄せられた感想を、「表面的反論」、「指摘者への反発」、「日本社会への責任転嫁論」、「教育システムへの批判」、「衝撃を受けて」、「消極的受容と諦め」、「積極的受容と内省」、「指摘から何を学ぶか」に分類して以下に紹介します。

3.1 表面的反論

まず始めに「自分の意見をまったくもっていない」という記述を言葉通りに取り上げて、それへの反論がありました。その殆どは「意見を持っていないのではなく、みんなの前で意見を言うのは恥ずかしいし、自信がないので、意見をはっきりと表さないだけ」だと主張します。その背景は「今まで育ってくる過程で他人と意見を闘わせたり、他人に指摘されたりして自分を高めるという経験がなかったから」とか、「学生自身が外とコミュニケーションをとることが

苦手となり学生以外の外部の人が意見を把握できない状態になっている。」とし、「その問題を解消する手段として、BBS が用いられるのは有用な手段だと思う。」とか「自分の意見を発信する方法をもちにくくなり他者とのコミュニケーションをとることが面倒になり煩雑に感じてしまうことからくるコミュニケーションの不足からくる」とか、「愛媛は保守的と言われるのをよく聞かすが、外見はそう見られながらも、内面ではみんな自分の意見をちゃんともってるし、それを大事に考えていると思う。」などと主張していました。

3.2 指摘者への反発

次に、愛媛県や愛大生を名指して問題を指摘した上田氏への反発として、「上田さん自身が学生とのコミュニケーションをとらなかったことにもそういう風にしてしまった要因があるのではないか」とか、「(前略)今の学生は、自分の意見を持っていなくとも生きていける環境にいる。そして、何でも簡単に手に入れることができるので、自分の行動に基づいて行動するという気持ちは生まれにくい。要するに、ハングリー精神は少ないと思える。(中略)この意見を述べた人が、どこの大学にいたか知らないけれど、どこの大学もそんなに違ったものではない。それならば、「今の大学生は自分の意見を持っていない。」といわれた方が納得できる。どこまで、「愛大生」とコミュニケーションをはかったが分からないが、愛大生に失礼な言い分ではないだろうか?」とか、「私には、この人は愛媛大学の生徒に不満があっただけでなく、なにかしら愛媛大学での人間関係がうまくいってなかったとか、何か愛媛県に恨みがあったとか、そう言うことも裏には見えるような気がします。」というような感想もありました。

更に、「正直言って愛媛出身で愛媛大学に進んだ私としては、愛媛をコケにされてあまりいい気はしませんね。先生はこの人とどういう間柄だったのかわかりませんが、昔の職場をでて本の中でここまで馬鹿にする人をどう思いますか。」とか、「著者である上田氏も、この愛媛の教育に携わるものの一人であったのですから、こういった本によって、愛媛の教育を批判するという消極的行

為をとるよりも、この愛媛で直接、意見を述べ合ったり、意見をうまく伝えることができるように手引きしたりといった、積極的行為によって、愛媛の教育をよりよいものに改善し、一教育者として、今の子供達を苦しみから救い出してほしいものだと思えます。」とか、「彼は何年前に、この愛媛大学で教鞭を執っていたと聞いたのだが、学生は意見を持つべきと考えているのならば、何故そのときに意見を持つ学生へと教育を施さなかったのだろうか、またそのような教育を施していたとしても、それができなかった責任も考えずに人に責任転嫁をするのは卑怯な方法ではないのか。彼の論文はかれ自身の顔に泥を塗るものであり、彼の能力を疑わせる作品になってしまっていると思われる。」とか、「愛大の教育を教える側だった上田先生が、愛大の教育に対して「兵隊アリを育てている」というような批判的な意見をもっていたのなら、自分が内部にいるときからその教育を変えていこうとすべきだったと思う。外部に出てから意見を言っても、なかなかみんな聞く耳を持ってくれないと思う。」と続きます。

3.3 日本社会への責任転嫁論

次に、批判の矛先を日本の社会制度に向ける一種の開き直り的感想として、「自分と違う意見を持つ相手と、対立してまで自分の意見を言う人が少ないだけだと思います。」とか、「意見をよく言う「議論上手」な人がいたとしても、今の日本の世の中ではあまり好かれず、煙たがられるような気がします。それよりも周囲の雰囲気に合わせていた方が楽です。以上のように、ただ意見をもってもそれを果たして周りの人がそれに対応してくれるか、どうかの問題ではないのか」とか、「自分の感情や、思いをどう表現すればいいのかその手段が、わからないのでないかと思う。それは、一部の学生に見られることではなくて、一見自分を持っているような人でも案外、他人のいった事の繰り返しや、知識を意見と勘違いしている人が大半なのではないだろうか。それは、長い間培われてきた日本の体質のような気がする。」というのがあります。

また「私も含め、今の人は対人関係において嫌われることを恐れる傾向にあ

ります。だから、本音の意見を持っていても「出さない」のではなく、「出せない」といったほうが適しているかもしれません。自分の意見に対する自信の有無以前に、自分に対する自信のなさが原因で本音をだせないのです。人とのコミュニケーション不足を生み出している原因もここにあるような気がします。」とか、「日本人は集団の中に所属することを好むと思います。そのような日本型のシステムを、この文章の作者は、終焉と捉えています。日本のシステムに原因を押しつけてしまっても何も始まらないと思います。」とか、「いきなり別のシステムへというわけにもいかないと思います。だからここまで発展してきた日本型システムを終焉させるのではなく、変化させていくべきなのではとおもいます。」と続きます。

さらに「個性重視の教育？ そんなことしたって社会に出てまずフレッシュマンが突き当たるのは自分の意見を言える世界ではない。根回し、接待といった一見不必要なことが不可欠な日本社会にあって今、すぐに欧米型のような意見のバンバン出るような教育が果たしてできるのか？ またその教育を受けた青年たちは日本社会に順応できるのか？ 素朴な疑問です。その本質は学校教育だけでなく、現代社会の根底にあるという気がします。」と現代日本社会への疑念を表明するのがあります。

3.4 教育システムへの批判

一番多い感想は教育システムへの批判でした。「意見を伝えるのが下手であるという点には、今の教育制度に問題点があると思います。愛媛の教育は、保守的であるといわれている事からもわかるように、授業の中で発表したり、意見を言うと言うことは、極端に少ないように思います。この消極的教育が、コミュニケーションをとるのが下手な子供を生み出していると言えるでしょう。」とか、「日本の教育に一貫していることは、平均的な人間をつくるという事で、それ以下もそれ以上も望んでいないことだ。だから突出するものがでてきたら、排除しようとする。日本の教育システムは、ある程度までは成果を上げれたが、これ以上は無理だと思う。」というものです。

また「私はその原因のほとんどが現在の日本の教育システムにあると思う。大半の学生は大学に入学してから今まで一度は『こんなはずではなかった』と考えたことがあるのではないのでしょうか。教育する側にたっている人達は学生を非難する前に現行の教育システムを考え直すべきだと思う。もちろん私たち学生もこういった問題に責任を転嫁し、逃げてはいけない。もっと努力すべきだと思う。ただ、私たち学生に『意見を持たない』という烙印を押すのはやめていただきたい。持てないのではなく、持つための機会を与えられずにここまでできてしまったのだから。」と続きます。

さらに「文部省の教育方針というものは、平等という名目のもとに、ゆがんだ平等感や公平感を押し付けているだけのようと思われる。それによって、個人個人の個性や意見が殺されていった結果が、愛媛県であると思う。」とか、「愛媛県は保守的だといわれていますが、教育にもそれがあてはまると思います。非常に画一的で、先生の価値観は絶対であるため、生徒達は自己抑制をして先生の価値観に従うことを強制されるといったまるで洗脳のような教育を受けてきたような気がします。このような教育の中では個性が育つはずなどありません。愛媛から個性的な芸能人が育ってこなかったのもこのような教育に原因があるのではないかと思います。」とか、「教育は一種の鑄型である。親が子供の鑄型をつくってしまう傾向が日本では強い。社会に適應するようにしむけている心の装置が、幼い時期に強く型にはめられてしまうことにより、欲求を我慢するような機能を持つようになり、こだわりの人間を育てるよりも、言われたことを、競って、かつそつなくこなすサラリーマンタイプの人間を、猫も杓子もめざすようになってしまった日本の現状にも問題がある。」と、延々と続きます。

3.5 衝撃を受けて

「愛大生が、全国の大学生の中でとりわけ元気がないというのには驚きました。「最低の大学」とか「愛大なんかいたらダメになる」などという言葉は、ショックでした。このまま受け身の立場に徹しているだけでは、本当にダメに

なりそうな気がします。」とか、「この本をよんでみてショックをうけたのが、「愛大生にもとめているのは、疑問を感じず素直に働いてくれる子」というのを企業の地位高いひとがいったということです。企業がこのような人材を必要としているようでは教育自体そのようなものになってしまうことは避けられないでしょう。そのようなただ「素直な子」は扱いやすくいいでしょう。しかしそういうところは、軍隊みたいな「個」を尊重しない世界を想像させます。極めて日本的な考えです。この県内の企業だけでなく、日本の企業は実はこのように感じているのかもと思えば、それらを悲観してしまいます。でもそんな「素直な子」にはならず、問題意識をもっていることがやはり学生には必要なのではないでしょうか。でないといつまでも日本の集団意識は変わらないと思います。」という感想もありました。よほど、衝撃的だったと思われます。

3.6 消極的受容と諦め

「自分でもそうかなと感じる」という感想も少なくなかった。典型的なものは「意見を持っていても発表しないのでは持っていないも同然」とし、「個人として集団に同調することに何ら疑問を感じず、愛媛大学という小さな集団に溶け込んでしまったために、自分の意見は集団に従ったものであり、たとえ異なった考えを持っていたとしてもそれを言うことによって疎外されては困るという逃げ道を通っているのだと思います。」とか、「人的、地理的問題があるのではないか。愛媛大学文系の学生は県内出身者、または地元占有率が高いように思う。地元愛媛は文化的にも突出しているわけでもなく、やはり県外からの学生に比べるとユニークさ、人間の面白さが少なく私自身感じる。つまり学生の集団自体が内向的であり、その結果として意見が出てこないのではないだろうか。」というものでした。

さらに「ここの大学の人たちはなれ合い集団だと思います。高校や小学校の延長で入学している人もいるように思えます。小学校からずっと同じクラスの人たちというケースもこの大学の中では当たり前なようです。なれ合いは結局だらだらとした行動、思考へと人間を導いていきます。」とか、「ちょっと前ま

では日本でも学生運動などが盛んでした。今の愛媛大学ではそんなこと起こりそうにはありません。社会の出来事に無関心な人が多くなっているのではないのでしょうか。こういう事からも考えると、この上田さんの意見も否定できない。」とか、「また、私は自分の意見をまったく持っていないということと、自分の意見を発表しないこととは、あまり変わらないと思う。なぜなら、両者はともに自分から発信しないという点で、まわりに影響を与え、変化させることがないからである。」と続きます。

3.7 積極的受容と内省

上田氏の言葉から積極的な意味を見出そうとする感想も多くありました。「上田先生の授業を受講した事のあるわたしとしては先生の発言は単なる否定だけでなく、その厳しい口調の裏には我々への、警告そして啓発が有るのだと思います。」とか、「自分の意見を持っていない人はいないだとか、教育に問題があるとか、自分自身に非をもとめる意見や考えが少ないように思われます。そのような教育を受け入れてきたのは他の誰でもなく僕たち学生・生徒たちです。ここには教育を行う側と受ける側のコミュニケーションの欠如が見受けられるのではないのでしょうか。従って自分の意見を持っていない学生を多く作り出してしまったのは、教育者でもあり、また学生自身でもあると思います。」とか、「現代人は他人志向型であり、内部志向型でない点等から大学生が自分の意見をあまり持たなくなったのではないかと思う。」とか、「これまでの日本社会において、個性が強すぎる人材は、集団行動・生活を乱す可能性があると考え懸念されてきた。このような状況を改善するためには日本社会に根付いている「長いモノにはまかれろ」主義を断ち切らないかぎり、自分の意見をしっかりとつ学生は増えないであろう。」はその例です。

さらに「日本人は他人より目立つことを嫌い、本音を隠すという性格がある。恥をかくことも嫌がり、他人とは本音と建て前で一定の距離を保つ。意見をもっていないのではなくて、意見が言えない。日本人はコミュニケーションに相当の努力が必要とつくづく思います。」とか、「みなさん、意見を持っていないの

ではなく意見を「言えない」のである、と書かれております。それは、意見を持っているという事になるのでしょうか？ 意見を言うということとは自らの考えを人にも伝えてコミュニケーションを図ることです。コミュニケーションが大事だ大事だといいいながらも意見は「言えない」なんて矛盾しているような気がします。ゼミや BBS において与えられているせつかくのこの機会を活かしてはつきりと自分の意見を「言う」ことにします。このままでは、意見を「言えない」「言わない」自分を、教育制度や社会のせいにして、正当化しあきらめてしまい、トップダウンの「暗黙の了解」に従う兵隊アリになってしまいそうです。」と続きます。

「これまで学校教育という枠組みのなかで生かされてきました。それは明らかに自分を押し殺すための日々でした。大学に入学して、張り巡らされていた鉄格子が崩れ、自分という存在を初めて確認した。しかし、同時にルールを見失って途方に暮れたのも事実です。いままで、反論をすることは戒められ、意見は許されませんでした。一見、平和で秩序のある世界はそのような圧力と、服従せざるを得ない非力な者たちで構成されていました。横並びの兵士たちは自由ですが、不自由です。一個人ではなく、一団体を構成するパズルの 1 ピースにすぎません。そこでは人格はあまり重要ではないのです。この日本型システムは、すでに「人」をつくる根っこから始まっています。だから、ピラミッドの上層を改造するだけでは足りないと思います。本当の社会の変革には、そういう思考、人を育成する教育の変革が欠かせないと私は思います。」という内省もありました。

3.8 指摘から何を学ぶか

指摘を正面から受け止めて、何かを学んだと思われる感想も少なくありませんでした。「悪いことは悪い 愛媛の教育は、戦前の帝国主義の教育と、さほど変わりはないのではないかと思う。お国のために命を懸けて戦うことを美德と教育された戦前の方針と同じである。それに疑問を感じる事が、タブーとされたことを考えると教育の恐ろしさを感じざるを得ない。時代が変わっても、

日本は、昔ながらの体勢を崩さない傾向があり、政財界の不祥事も、最近になって表沙汰になっているだけで、汚職は昔から伝統的に行われていたらしい。問題は、それを今まで見て見ぬふりにしてきた国民の方である。一国民がどう叫ぼうと権威に声は届くはずはない、とあきらめていたからだと思う。ここが日本人の悪いところである。行動を起こさない限り事態が変わるはずがないのだ。最近、東京地検特捜部の活躍で汚職事件がどんどん明るみに出てきていることは、舞台裏でもみ消される日本における汚職の歴史上、大変進歩的にとらえられる。このように悪いことは悪いと、当たり前のことを当たり前だといえる時代にするも、しないも、私たちにかかっていると思う。もちろん、教育の側も生徒に正確な判断力と、発言力を養わせる教育体制を作ってもらいたい。」もその一例です。

さらに、「愛媛の風土が内向的、いわば保守的であることが強く関係している。この風土はちょっとやそつとじゃ変えられるものではない。それになじんで生きていくか、反発しながら生きていくか、それともこんなところでは出ていくか。たぶん最後のものが最も賢明な選択だと思います。生まれてこの方愛媛にすんでいます、私は愛媛が好きではありません。」とか、「“衝突”は分かり合えるために必要なコミュニケーションの手段だと思います。しかし残念なことこの“衝突”は、“自分の意見”をはっきり主張する人としか起こすことができません。しかも、この“衝突”が喧嘩にまで発展してしまうと大変です。“自分の意見”を相手を傷つけることなく上手く伝えることの難しさを痛感することが多い毎日です。」と続きます。

4 デイベート

会議室への学生によるこれまでの書き込みは、たまにある筆者への質問を除けば、殆どが感想で、反対意見とか、批判とか、いわゆるデイベートからは遠いものでした。ある時、一人の学生から「この会議室で先生も他の人の意見に対する反対意見の方をより評価するというようなことを書かれていたと思いま

す。確かに他の人の意見に応答しないとこのように BBC をする意味はないでしょう。しかし、実際に知らない人の意見に対して「反対だ」と言いにくいし、言うとか何か問題が起こったりはしないのかなと思ってしまいます。(これが日本人だということなのでしょうか)」という問題提起がありましたので、筆者は「反対意見を言うということは、コミュニケーション上、リスクが高いのです。ですから、より慎重な発言が必要になります。反対意見を上手に言うには、他の人が反対意見を言うのを見て参考にするか、自らが反対意見を言ってみて、経験を積むしか他に良い方法はないのです。ですから、今まで、反対意見を言ったことのない人は、いつまで経っても反対意見を言えなくなる可能性が少なくないのです。」と答えました。

すると、ある学生が「反対意見をいってみよう」と題して、他の学生が書いた「電子的コミュニケーションによって人間が変わろうが、変わるまいが、たいしたことではない。使う道具が増えたり、変わったりしたぐらいのことだと思う。それが商売に関係するとかいうならともかく、インターネットの利用者数やパソコンの普及率を気にする人の神経が理解できない。日本人が「個」にめざめようが、めざめまいがどうでもいいことだと思う。日本人と欧米人の比較もおもしろいことかもしれないが、ただそれだけのことで、「日本人はこうあらねばならない」とか「欧米の人のようにこうならなければならない」と考えるのはくだらないことだ。」という感想文を取り上げ、「どうも消化不良のような意見に思えます。日本人的な考え方でいくと、皆がおとなしく意見を言っているところに、このように挑発的な書き方をする所に不快感を感じます。また、人それぞれの考え方を尊重すべきで、貴方の意見も一つの意見として尊重すべきと考えれば、他人の考え方を尊重できず、くだらないと断言している貴方の意見こそくだらないということになってしまいます。どうでしょう。そんなにくだらないと思っているのなら、授業中に手を挙げて、「先生 くだらないです」と言ってみては。電子的コミュニケーションをただの道具と思っているのなら、恐らく、電子的コミュニケーションだからこそ言える意見というわけではないでしょう。もし、それをする勇気がないのなら、あのような意見を言

えることがすなわち、電子的コミュニケーションの恩恵ということで、もう一度考えてみるのも良いのではないかと思います。」と批判しました。

そこで、会議室でのディベートを促進させるため、筆者は以下のように第3回目の宿題を出しました。

「第3回目の宿題です。以下の中から一つ選んで下さい。

1 この会議室に書き込まれた発言を一つ選んで200字以上で理性的に批判して下さい。

2 この会議室に書き込まれた発言（の中で質問すれば返信を期待できるような人）をいくつか選んで200字以上で理性的に質問して下さい。」

この宿題のために学生同士の意見交換は確かにある程度は促進されました。「意見を言わないような人には「優しい」人が多い」に対して「意見を持っていない人は自分も他人も正面からまっすぐに見つめることが出来ない人」とか、「相手の気持ちを思いやるから、黙って聞く」に対して「相手のことを思いながらの自己主張も必要」とか、「集团的一体感がこれから伸びるべき個性や能力の芽を摘んでしまう」に対して「一番楽な道である「組織の一員」として流されることさえも、ある意味現在では一種の才能といえる」とか、「顔を見て言えないことであってもBBS ならいえる」に対して「ネットワーク化された組織の「人間的な面」とはすごく薄っぺらいもの」とか、「女性は男性に比べて、「感情」が先走るあまり「合理的」な行動や思考ができていない」に対して「それは人間性の問題じゃないの」とか。しかし、その実態は、「多くの方が、誰かの意見について批判するとき「……さんは……と書かれましたが……」とある一定の文章だけを取り上げて「それについては……ではないですか?」という具合に書いています。まるで重箱の隅をつついているようです。言葉のコミュニケーションにおいて必要なことは、「全体から意味をつかむこと」だとおもいます。」にあるように、重箱の隅をつついたようなものが少なくなかった。

また、「質問・感想・意見を組織コミュ論のなかでやりとりするという宿題がでているが、そのなかを見てみるとなかなか面白い。まず第一に、やりとり

する相手である。一概には言えないことだが夜間生は夜間生と昼間生は昼間生とのやりとりが多いようである。第2は、BBS を通しているにもかかわらず結局のところ仲が良かったり、面識の幾分あるもの同士がやりとりしているようである。私もこの宿題が出たあとに私の方に意見出すから意見返して、といったようなアプローチがあった。学生のほうも相手の顔が見えないといいながらも気を使っているのだろうか。この気使いが日本人らしい所なのか少し見られる。例えば批判を言っていることに対してそのあとに（申し訳ない）といったものが付いたり、いいまわしがいくらか優しく、厳しく言及しているものは少ないようである。そのせいか意見の言い合いになり、何度もメールの交換がされているものは、ほとんどないのではないだろうか。」にあるように、本当のディベートにはなかなか至らなかった。

5 愛大生への指摘への第二段階の反応

筆者と上田氏との関係について、「私は上田氏とは面識はありません。ただ、私がここに赴任する前の1994年の夏に、水枯の年でしたが、上田氏が読売新聞に、水枯のため愛媛の人々の連帯の必要性が再び認識されたことを記事にしていたのを読んでいました。上田氏は良くテレビ（特に教育番組）に出たり、本を書いています。ですから上田氏の名は良く知っていました。」と会議室で知らせてありました。学生から寄せられた沢山の感想に上田氏も興味を抱くかもと思い、経緯を説明した電子メールで「興味深い結果、というか、保守的発言の多さに驚いて、これは研究資料としても貴重なものと思い、何か整理してみたいと思いました。そして、それを上田先生と私、もしくは上田先生と学生達のコミュニケーションのキッカケとする方法を模索してみたく思い、今回のメールを差し上げる次第です。」と述べました。

すると、上田氏より「私の著書を学生に投げかける問いのきっかけにしていたらいいということ、たいへん嬉しく感じております。」とか、「愛媛滞在中に「身を賭して」書いた文章であるだけに、私の実感そのものであることは間

違いありません。」とか、「このような題材には、電子会議室がもっともふさわしいのではないか」とか、「詳しく知りたいと思いますし、その結果に関して先生と意見を交換させていただければ、そして何らかのフィードバックが愛大生にも、あるいはより広範な人たちにも及ぶようにできればとても嬉しいです。」といった内容の返信がありましたので、このことを学生に紹介するとともに、学生から寄せられた感想の幾つかを電子メールで上田氏に紹介しました。

期末レポートの課題は次のようなものでした。

「課題は以下の中から一つ選んで4000字以上で書いて下さい。(他の学生にも読ませるために) 授業の会議室へ入れると学習参画として評価します。

- 1 学科 BBS のあり方について
- 2 愛大生に関する上田紀行氏の指摘について
- 3 組織コミュニケーションについて

約120名の学生が期末レポートを提出しました。当初、履修を決意していたらしい150名からはこの時点でかなりの脱落者が出たようです。その中の約1/3は「課題2 愛大生に関する上田紀行氏の指摘について」を選びました。レポートを会議室へ入れたのは、約半数でした。会議室へ入れるのが面倒という人もいましたが、自分のレポートを教官以外には読んで欲しくないという人も少なくないようでした。

反発的あるいは保守的感想が多かった第一段階の反応に比べて、この第二段階の反応は、共感的あるいは積極的反応が多かったのが特徴です。典型的なものとしては、「非常に読みやすくユーモアのある文章で問題提起がなされていて、いろいろと考えさせられる本だった。もし、上田氏の授業を受けることができたなら、はじめは大変で不快な授業だと感じるに違いないが、自分の価値観を変えるような忘れることのできない授業となることは確かだろうと思った。上田氏の愛大生に関する指摘について、自分でも本当に情けないと思うのだが、反論するどころか、共感してしまっている。松山市役所はコネ、つまりカネがないと就職できないというのは地元では有名な話である。しかしそのことをだれも問題にしようとはしない。私たちは愛媛のさまざまなことに

対して不満を抱えていながらも、それをどうすることもなく傍観し、あきらめている。この姿勢こそが本当に問題なのである。上田氏がこの街には自分は必要とされていないのではないかと感じられたのは、自分がいくら変革しようとしても、とうの愛大生に（県民性という理由からか）進んで変革しようという気が見受けられなかったからではないのかと思う。」とか、「私の後輩に将来の夢は公務員だと言い切る人がいるのだが理由を聞いてみたところ、次のような答えが返ってきた。「僕は人を使って仕事をするより、人に使われる方が向いていると思うんです。それに、人に使われる方がいろいろ考えなくても済むし楽でしょう。」この答えを聞いたとき、ここにも軍隊ありになろうとしている人がいる、このままでは愛大が、愛媛が閉鎖的なままではないかと思う反面、確かにそうだ、人を使うより使われる方が私にも向いているのではないか、出る杭は打たれると言うし、という自分がいたのである。」

また「私が愛媛大学に合格し、愛媛に行くことが決まったとき、母は私にこう言いました。「愛媛の人間は信じたらいかん。口で言うことと心の中で思っちゅうことが全然違うき。高知の人間とは全然違う。高知におるときみたいに思うこと全部言いよったら後で痛い目に遭うで」（中略）母が愛媛に来る前に私に行った忠告、あれは少し過激だったと思うけれど外れてはいないというのが、愛媛に3年住んだ私の感想です。」とか、「そういった頭で考え、自分の立場をはっきりさせ、意見を述べる事が出来ない人間が不必要なのでなく、ただエヒメという旧体質のなかで必要とされているのだけであり、今後変わらないという保証もどこにもない。上田氏の愛大生に関する記述は一見すると愛大生を非難しているもののように読めるものの、文章の裏に愛大の事を真剣に考えて下さっていることがわかる好感の持てる文章であったことは否めない。私も松山出身の愛大生として、上田氏の努力を無駄にしないようシステムの変革に備えて日々努力したい。」というのもありました。

最後の授業の日に、前以って上田先生にお願いしてあったメッセージを学生に紹介しました。それは「私の発言をきっかけにして、皆さんが自分の意見を（反発を含めて）表明し、そこから議論の場が生まれつつあることを知って、

とても嬉しい気持ちです。(中略)たとえ反論されても、それは自分の存在が全否定されたことにはならないし、「この人は反論してくれるほど自分に関心を持ってくれているのだ」と思えば、それは自分への大きなプレゼントだとも言えるのではないのでしょうか。(中略)皆さんが私の、そしてそれ以上に栗原先生の「挑発」に応じることで、他の場では得られない何者かを獲得したのであれば、それはとても喜ばしいことです。(中略)私自身の発言に真摯に取り組んでいただいたことへの感謝を込め、メッセージを寄せさせていただきました。」といった内容でした。

この上田先生からのメッセージについても、いくつかの感想が寄せられました。「上田先生が「愛大生は意見を持っていない働きアリ」と述べているのを初めて知ったときは、自分がとてもバカにされた気がしてとても腹がたちました。でも先生のメッセージを読んでもみると、先生が愛大生のことをよく考えて書いたとわかりました。先生は他の大学の先生に「教えるのが楽」と言われる愛大生に、自分たちがどう見られているのかをしらせたかったんだと思います。私達は先生の意見について反論したり賛成したり様々な意見を述べあいました。私達が自分の意見を述べるきっかけを先生のメッセージは与えてくれたんだと思います。先生のメッセージを読まなかったら、こんな風に考えることはできず、反発心だけだったと思います。今回のことで人の意見を知る大切さを改めて教えられた気がします。」とか、「上田先生からのメールの中で『自分がそこにいてもいないでも世の中は同じように進んでいくのだ』といった、自分自身の存在感の希薄さにつながっていきます。しかし、自分が何かを投げかければその場は変わっていくものです。」の部分がすごく印象に残りました。自分が何かを投げかける、このことの大切さというか、楽しさというか、こうやって会議室でいろいろな人たちと意見を交換することによって少しずつわかり始めているような気がします。」とか、「上田先生からのメッセージを読んで前に『上田さん自身が学生とのコミュニケーションをとらなかったことにもそういう風に感じてしまった要因があると思います。』と書いていた自分を恥ずかしく思います。本当はすごくコミュニケーションもとろうとし、また愛媛大学を

愛していたのですね。」はその例です。

6 オフラインミーティング

電子会議室では、名は分かりますが、顔は分かりません。授業では、顔は見ることができず、名は知らないし、聞いてもなかなか覚えられません。会議室で興味深い発言をしている学生の顔を知りたいと思って、研究室に雑談に来るようにメールを出しても、億劫なのか、なかなか来ません。そこで考えたのが、オフラインミーティングです。「この授業ではお互いに顔も知らないままで結構本音を言い合うことも出来ますが、中にはこの機会に、顔を見て話合いたいという人もいます。10人以下なら、私の研究室を提供することも考えられます。何をやるかって？ 雑談です。そして、お互いの顔の確認です。お茶程度はだします。これも授業という組織のコミュニケーションを円滑にする手段です。」と会議室の常連に呼びかけて、賛同する人同士が実際に集まったのです。でも、日と時間の設定が大変でした。学生は皆、サークルやバイトで忙しいのです。昼間主生だけでなく、夜間主生もいるし、1回に集まれる人数は少ないので、何回も開きました。2回以上参加した人も含めて延べ40人くらい参加しました。これがコミュニケーションの試みとして意外に好評でした。

参加した学生からの感想には「実はゼミ以外で研究室に行くことすら初めてだったもので、かなり不安でした。誰が参加されるのかも知らなかったし。でも、研究室のドアを開けた瞬間前に広がっているおかしとウーロン茶を見てなんだか安心しました。(ハハ)最初はみんな緊張した感じでしたけど、そのうちうちとけてきて……。私にとって昼間主の方と知り合いになれたことがとてもうれしかったです。」とか、「先生とも初顔合わせで、ましてや来ている方もWさんしか知り合いもおらず、非常にドキドキしました。なにせ、ゼミの研究室以外の研究室はいったことないので、。しかしいってみれば非常におもしろかった。夜間主のかたが半数くらいいて、ほんといろんな人がいるのだな一

と実感しました。なんか昼間主の私にとっては、夜間主で働きながら勉強している方や、年齢の違う方とお話をするのはひじょーに自分にとっての貴重なじかんでした。気付けば2時間もお話ししていたけど、あっという間でした。ああいう形で知り合いが増えるというのはとても嬉しいです。おそらく昨日参加しなかったら会うこともなかったし、話をすることもなかったかもしれません。次もその次も絶対また参加したい！！と心から思いました。雑談でしたが私にとって非常に実りがあったように思いました。皆さん、少しでもいってみたいと思うなら、気軽な気持ちで参加してみてください！」というものが代表的でした。

また「夜遅くになったのにも拘らずみんな結構しゃべりまくりましたね。個人的にはコミュ論の議論の中で「なるほどなー」とか考えさせられる意見を出していた人に偶然？ 会ったりもできてほんと、良かったです。おとなしい人達も先生に促されて徐々にとけ込んでいたように思うし、こういう効果も少数の「ミーティング」の利点なのかな、とも思います。自分というものを改革したい人などは特に参加する意義は大きいと思います。でもまだまだ皆さん「はにかみやさん」が多いですね（自分も含めて）。もっともっとみんなオープンになろうよ！本音トークとか、いろんなことに対する疑問や意見を誰かに（先生や友人）聞いてもらったり自分も聞いたりする事、結構大事だと思います。」とか、「先生の生徒との交流を大切にしてくださる姿勢にはたいへん感動して」などがあり、こうした対面的コミュニケーションを渴望している学生も少なくないことが良く分かりました。

7 アンケート

宿題、学習参画、期末レポートと、通常の授業以上に学生が力を入れているのが読み取れたので、期末テストは免除することになりました。その代わりに最後の授業の日にノートを提出させました。また希望者だけでも教室に残って自己紹介することを提案しましたら、80名くらいの出席者の内、30名くらいが参

加しました。これも学生同士お互いに顔と名を知ることに関わり、好評でした。テストの日はノートを返却し、授業に関するアンケートを書いて貰うことにしていました。ノートを返却する時、名簿順に名を呼び上げて渡したので、学生の顔を始めてほぼ全員見ることができました。

学生との最後のコミュニケーション手段としてアンケートをどう仕掛けるか色々考えて、次のような文面を会議室に入れました。

「組織コミュニケーション論 アンケート

はじめに：回答には私へのメールと、会議室への書き込みのどちらでも構いません。会議室に書くということは、アンケート回答を他の受講生へ開示することを意味します。

【設問1】 授業を受ける前と後で自分は何か考え（考え方）が変わったと思うか。何が変わったか、もしくは変わらなかったか、できるだけ詳しく述べて下さい。

【設問2】 授業という手段を介して私が諸君に「一番伝えたかったこと」は何だと思うか、そしてそれは「何のために伝えたかった」のだと思うか、できるだけ詳しく述べて下さい。」

約120名から回答がありました。その内、20名からはメールで回答がありました。内容を他の学生に読まれたくなかったのでしょう。その他は会議室で回答しました。

「考えが変わったと思うか」という設問1への回答には「パソコンに対する「食わず嫌い」が克服できた。また BBS で知らない人達とコミュニケーションがとれる喜びを知りました。」というのが一番多く、それ以外では、「自分の頭で考えるレポートを書いたということが、最も自分を変えた。」とか、「自分の行動をより客観的に見るできるようになりました」とか、「自分の中で「自己主張はしないほうがいい」という考え方から、「自己主張は絶対にすべきだ」という考え方へ変わったのです。いつのまにか……意識改革です。」とか、「意見を発表するというのが、問題を解決するのに欠かせないものと気がつきました。」とか、「本音の会話の重要性というものが少しは理解でき

た」とか、「先生と意見の交換ができる楽しみを知ることができた」とか、「いままで無縁に思っていた人も自分次第では、宝になるような気がした。今までがらくたにあふれていた世界が自分の手で宝物の宝庫に変えることができると考えるようになった。」とか、「自分の意見に対する反論を聞くことが楽しく感じられるようになった」などがありました。しかし、中には、「講義の形式も内容も面白いと感じた人が以外と多かったみたいですが私はどうしてもそう思うことができませんでした。パソコンの便利さと必要性はわかりますが実際の授業には向かないと思いました。思った以上にパソコンでの意見交換は難しいことに気付きました。」という貴重な少数意見もありました。

「一番伝えたかったことは」「何のために」という設問2への回答には、「人と人が自分の意見を持ち、コミュニケーションをとることの大切さを先生は僕たちに伝えたかったのではないのでしょうか。一方通行の今の大学の教育をみんなに変えていこうという訴えかけであるようにも思えました。」というのが一番多く、それ以外では、「学生に'自分の頭で考える'ことをさせることによって、社会に出ても通用するようになって欲しかったんじゃないかなと思います。」とか、「コミュニケーションや情報伝達の価値、有効性とそれを利用しないもったいなさ」とか、「自分探だと思った」とか、「人と人との関わり方であると思う。人と面と向かって言い合えない世代（私たち）に対して、柔らかくではあるが「それでいいの?」というメッセージを投げかけてくれた気がします。」とか、「社会に対して問題意識を持ち、自分の意見を発表してまわりを変えていこうとすること」とか、「組織などに流されずに個を確立すること」とか、「異質なものとコミュニケーションをも積極的に行うこと」とか、「『日本型システムの終焉』、ここに書かれてあったことに尽きるのではないか」とか、「端的に言えば「心の4つの窓」を開けろ!ということではないでしょうか。隠された窓（自己開示）や未知の窓を学生に探求して欲しかったのではないか?」とか、「狭い世界で満足せず、自分を客観的に見ることができ環境を確保しろ」などがありました。

実は、アンケート回答が出揃うより早く、筆者は意図的に次のようなメッセー

ジを入れました。「設問2で「私が伝えたかったメッセージ」は「自分の望むことは自らが求めなければ得られない」ということです。正解者があまりいなかったの、残念に思っています。また、「何のために伝えたかったか」は「君達のため、君達の後輩たちのため、君達の次の世代のためにこの大学を改革する」ことです。これも正解者が殆どいなくて残念に思っています。まあ、短い期間のコミュニケーションでしたので、限界があったのでしょうか。」すると、「先生が伝えたかったことについて先生の考えを読ませてもらったのですが、それは、私たちの根本的なところにあったんだなと言うことを、今回の授業を通して切々に感じました。「自分が何かを投げかければその場は変わっていくものです。」と上由先生のメッセージにもありましたが、先生も同じようなことを伝えたかったんだなと思います。私たちのことをこんなに真剣に考えてくださっていたことに感謝したいと思います。」のような感想も寄せられました。

ま と め

これから紹介する学生の言葉が全てを物語っています。最後の講義の直後には「ついに今日で組織コミュニケーション論の授業が終わってしまいました。なんだかさみしいです。」とか、「この授業でまず良かったことは、学科のBBSを使う機会を与えてくれたことです。多分、いや、絶対この授業でBBSを使う機会がなければ僕はずっと、卒業するまでにBBSを使うことはなかったことでしょう。」とか、「この講義の中で最も心の中に残っている内容は、「組織内人間」の話です。「組織内人間」はコミュニケーションの少ない人間に多く、それにより自分が得ることが可能な情報量が少なくなり、社会や社会一般の出来事に対する視界が狭くなってしまいます。結果的に自分の価値観を自分が所属するその集団の中にしか見いだすことができず、一定の集団の中では上下関係など実力とは乖離した手段などによってもでかい顔をしていられるが、しかしその世界からは一步も外に出られない状態に陥ってしまうのです。」と

というような感想も寄せられました。

アンケート回答の中で寄せられた講義への感想には、「この講義は、自分のなかでも色々考えさせてくれました。その内容は今後自分が成長する要素になると思います。印象深い授業でした。」とか、「改めて教育という社会的役割を認識しました。もっと早い段階でこういった教育を受けることができればな……と悔やまれる思いです。」とか、「生徒の意見を言う場を与えてくれて、授業というより先生とのコミュニケーションという感じでした。」とか、「今までの講義ではこのような形式はなく、何て斬新な考えを持った先生なのだろうと思うばかりです。本当に色々な事について考えさせられる素敵な講義だったと思います。」とか、「私たちの思考の変革を示唆するに十分な講義だったと思う。」とか、「私にとっては大変苦手な法律や経済と違ってすごく身近に考えられ、また納得したり感心させられるようなことも多かったので興味深い授業となりました。」とか、「この講義を受けて自分が本当に変わるかどうかは、今後の自分の行動次第だということを忘れずに、いろいろなことにチャレンジしていきたいと思います。」などがありました。

愛媛大学に赴任して3年半を振り返って見ると、この組織コミュニケーション論授業を終わってみて始めて、筆者も教師として冥利に尽きる思いがしました。今後、この経験を生かして、情報技術を大学教育にいかにかに生かすか、日本の大学教育はいかに変革されるべきかを考えて行きたいと思っています。

謝 辞

1998年度に愛媛大学法文学部総合政策学科の3、4回生で、筆者の「組織コミュニケーション論」を受講して学習に参画した全員に感謝の意を表します。また筆者の授業企画に多大な協力を頂いた上田紀行先生にも感謝の意を表します。